降臨節第4主日　　2010/12/19

聖マタイによる福音書第1章18節~25節
於：聖パウロ教会　司祭　山口千寿

新約聖書を読んでみようと思って1ページを開いてみたら、イエス・キリストの系図として、アブラハムから始まって何代にもわたって沢山の人の名前がカタカナで並んでいるのには、閉口するのではないでしょうか。わたしも、系図は飛ばして次のイエスさまの誕生物語から読んでみたら、と勧めることがあります。

多くの方がマリアやヨセフの名前は知っているとしても、この系図に出て来る人の殆どの名前は、初めてお目に掛かるものばかりで、一体、何のために書き連ねているのだろうかと疑問に思うことでしょう。自分の家系図であれば、多少は興味が湧くかも知れませんが、他人の家系図など面白くも何ともないのではないでしょうか。

わたしが子どもの頃、わたしの祖母はもともと美濃部という姓でしたが、「美濃部の家は、今は学問の神さまとして親しまれている菅原道真にまで遡ることができる」と、誇らしげに言っていたことを覚えています。自分は由緒正しい家の出だと言いたかったのかも知れません。しかしこれは、一歩間違えると差別に繋がりかねないので十分、注意をしなければなりません。わたし自身は、平安時代にまで系図を遡ることが出来るとは信じていません。誰かの作り話であろうと思っています。

聖書の時代のユダヤ人は血統を大事にしましたから、イエスさまも生粋のユダヤ人としてお生まれになったことを強調したくて、最初に系図が置かれているのでしょう。確かに、信仰の父と呼ばれたアブラハムから出発していますから、イエスさまもアブラハムの子であることを述べようとしているのでしょう。ユダヤの伝統の中にお生まれになったと言いたいのでしょう。

更に、ダビデ王もこの中に登場しますので、イエスさまは王の系統を引いた正統な王位継承者だと主張しているのです。ユダヤ人は、ダビデの子孫からメシアが誕生すると信じていたからです。

つまりイエスさまはイスラエルの長い信仰の歴史の中にお生まれになり、ユダヤ人が長い間、待ち望んだメシアとしてこられたということです。イエスさまにおいて預言が成就したことを証しするのです。

しかし、この系図に出て来る人物を見ると、明らかにユダヤ人ではない異邦の人の名前が紛れ込んでいることに気がつきます。しかも女性です。女性の名前が系図に出て来ること自体、驚きですが、4人もいます。それは、タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻のバト・シェバです。しかも4人とも、一面においては、眉を顰めるような、行儀の悪い行動をしているのです。しかしその行動力が、尋常ではない結婚・出産を通して、子孫を残すという彼女たちの務め、彼女たちの正義を果たすことになるのです。

タマルという女性はカナン人です。イスラエルの人ユダの長男と結婚しますが長男は死んでしまいます。そこで二男と再婚しますが、二男も死んでしまいます。三男が残っていましたが、義理の父ユダはタマルを実家に返して結婚させませんで

した。そこでタマルは娼婦のなりをして義理の父ユダに近づき、ユダとの間に双子を生みました。子孫をもうけるためです。
ラハブは、やはりカナン人でエリコの町の娼婦です。ヨシュアがエリコを攻めるために2人の斥候を遣わしたときに、その2人を匿い逃がした女性です。イスラエルの神を真の神としたからです。
ルツはモアブ人でした。申命記には、「アンモン人とモアブ人は主の会衆に加わることは出来ない。十代目になっても決して主の会衆に加わることは出来ない」(23:4)と厳しく排斥されていました。ルツは夫に先立たれ、姑のナオミに従いベツレヘムに戻ります。そこでナオミの勧めで、自分の雇い主で遠い親戚に当たるボアズの寝所に忍び込みました。家を絶やさないためです。
ヘト人ウリヤの妻バト・シェバは、水浴びをしているところをダビデ王に見られ、床を共にするのです。ウリヤはダビデ王の陰謀によって最前線に送られて戦死します。ダビデとバト・シェバとの間に生まれた最初の子どもは死んでしまいますが、後に妻として迎えられます。2人からはソロモンが生まれ王位を継承します。それにはバト・シェバが一役買っています。
何故、このような異邦の女性、しかも、諸手を挙げて褒めるわけにはいかない人たちが、イエスさまの系図の中に入り込んできたのでしょうか。それは、イエスさまがどのような方としてお生まれになったのかを示そうとしているのではないでしょうか。
1つは、イエスさまはユダヤ人だけではなく、異邦人の主としてもお生まれになったことを現しているのです。マタイ福音書のクリスマスの物語には、3人の占星術の学者が東方から拝みにやってきた物語もありますが、系図の中に異邦の女性たちを登場させることで、イエスさまの誕生はすべての人々のための救い主が現れた出来事であると、主張しているのです。
2つめは、イエスさまは、「自分の民を罪から救う」ために来られた救い主であるということです。先程、ダビデが自分の部下であるウリヤの妻バト・シェバを奪ったことに触れましたが、ダビデは後に預言者ナタンからそのことを叱責され、「わたしは主に罪を犯した」と告白します。イエスさまは人間を罪から救うために、罪の歴史の中に入ってきてくださったのです。
マタイは、イエスさまの系図を総括して、「全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である」と3つに区切っていますが、時代の区切りごとに神さまの介入があったことが暗示されています。バビロンに捕囚となって移されて行ったのも、歴代の王さまを始めとして、ユダの人々、エルサレムの住民が上から下まで偶像を礼拝し主に背いて罪を犯した結果です。預言者は、神さまの審きをそこに見たのです。
イエスというお名前は、旧約聖書のヨシュアと同じ名前ですが、「神は救い」という意味です。人間の罪を引き受け背負うために、神さまが歴史の中に介入してくださった出来事が、聖霊によるマリアの懐妊です。
「系図」と訳されている言葉は、ギリシャ語の旧約聖書の「創世記」と同じ言葉が用いられています。創世記が、神さまが天地を造られた物語から始まっているよう

に、マタイ福音書もイエス・キリストによる新しい創造の物語です。神さまがイエスさまによって人間の罪を赦し、新しい人間と新しい天地をお造りになる物語が、ここに始まるのです。

今日の福音書は、この系図の続きですが、ヨセフの物語です。この後、日曜学校の生徒たちがページェントを捧げますが、イエスさまの誕生物語では、普通、マリアが主役でヨセフは脇役だと思われています。ところが、マタイ福音書ではヨセフが主役となっています。しかも悶々と悩み苦しみ、それが夢の中にまでも現れてくるような心の葛藤を抱いているヨセフです。

何故、ヨセフは苦しまなければならなかったのか。それは、彼が「正しい人」であったからです。マリアと婚約をしていましたが、一緒になる前にマリアが子を宿したからです。常識的に言ったら、マリアがほかの男と関係を持ったと考えるほかありません。それは、律法によれば石打の刑に相当します。それでヨセフはマリアを秘かに離縁しようとするのです。それがヨセフの義を貫くやり方でした。しかもマリアに対する愛を両立させる仕方でした。

しかし、そこに天使のお告げがあるのです。神さまの御心が示されます。それは、「恐れるな」という言葉で始まります。

わたしたちは、世の中を安心して暮らしていこうと思ったら、世間の習慣とかしきたりに従っていれば間違いはないだろうと思います。そのような道を選ぶことが確かな生き方のように思えるのです。

しかし神さまのなさり方は、そのような中にはないのです。世の中の常識に基づいた生き方よりも、一見、そこからはこぼれ落ちているかのように見えるものを通して、神さまの働きは始められるのです。わたしたちはそれを系図の女性たちに見ることが出来ます。また、マリアのヨセフに因らない懐妊の中にも見ることが出来るのです。

常識という壁を越えた、より優れた義である神さまの御心に忠実であるためには、わたしたちは心のうちに生じる苦悶や葛藤で悩む中で、そこにこそ深く語りかけ来られる神さまのみ言葉に耳を傾けなければなりません。ヨセフはその声を聞いたのです。恐れから解放されて、マリアを妻として迎え入れました。イエスさまをダビデの家系に受け入れて、その使命を果たすことになったのです。

イエスさまは、インマヌエルと呼ばれました。その意味は、「神は我々と共におられる」ということです。神の独り子であるイエスさまが、貧しい馬小屋の中でお生まれになった。この世の目からすれば、最も底辺に当たるような場所が、神の独り子が人となられた舞台です。神さまの祝福から最も遠くにあると思われるようなところが、神の臨在のしるしが現れる場所となったのです。神さまの支配は、ほかでは見つけることが出来たとしても、ここだけは遠く外れているとしか思えないようなところが、この世に神さまがお姿を現す場所として選ばれたのです。それが神さまのなさりようです。神さまがご自身の栄光を現される仕方です。

間もなくご降誕の喜びを迎えます。今日の特祷で祈りましたように、わたしたちの心の闇が照らされて、主をお迎えするのにふさわしい者とされますよう、備えたいと思います。